

“契丹大小字”諸説

吉池孝一

1. はじめに

契丹大字と契丹小字の区別について様々な説が出されたが、金光平・曾毅公 1957 及び金光平 1962 に至ってほぼ説は定まった感がある。このあたりの事情については劉鳳翥 1981 にバランスの良い記述がある。ただ日本の文献に対する評価につき、やや淡白な印象を受けるので、蛇足ながら、定説に到るまでの道のりを確認してみた次第である。確認において以下八つの文献を用いた。

- ①白鳥庫吉 1898。②羽田亨 1925。③金毓黻 1934。④山下泰蔵 1935。⑤長田夏樹 1951。
⑥金光平・曾毅公 1957。⑦金光平 1962。⑧長田夏樹 2001。

2. 諸説

①白鳥庫吉 1898 は、陶宗儀『書史会要』所載の五字を契丹文字とし、「郎君行記」（金代初期の碑文）を女真大字とする。「郎君行記」は現在では契丹小字とされるものであるからこの説を受け入れることはできないのであるが、文字の認識は正鵠を得ている。白鳥氏は、「郎君行記」の文字を“綴音文字（シラビチック）”とし、“元字”を左→右、上→下に組み合わせたものであることを文字資料に即して確認した。併せて、同様の指摘が既に Wylie. 1859 でなされていることも紹介する¹。この論は、確実な契丹文字資料としては『書史会要』所載の五字しかなかった時代のことであり、新たな資料の発見により次の段階に到る。

②羽田亨 1925 は、『書史会要』所載文字（「燕北録」からの転載とする）の五字を契丹大字とし、「郎君行記」および L. ker 氏により 1922 年に慶陵より発掘され 1923 年に報告された哀冊（以下、慶陵哀冊）の文字を契丹小字とする。羽田氏は、慶陵哀冊と「郎君行記」の文字との比較をとおして両者を同種の文字と認め、「郎君行記」を契丹文字としたわけであるが、これらが大小いずれの文字であるかということが問題となる。羽田氏は、史書に契丹小字の特徴を記して“數少而該貫”とあるものにつき、これを表音文字の特徴に言及したものとした。これにより、「郎君行記」および慶陵哀冊を契丹小字とし、『書史会要』所載文字（＝「燕北録」所載文字）を漢字に倣った契丹大字と結論した。この結論は、白鳥庫吉 1898 の「郎君行記」を“綴音文字”とする論と新たな契丹文字資料を結びつけたことにより引き出されたものといえよう。また、契丹小字資料には“音字”と“意字”すなわち

¹ 以下に白鳥庫吉 1898 の論点を抜き書きする。なお頁数は白鳥庫吉全集第五巻による。【】は吉池。

■然れども氏【Wylie】が女真文字の綴り方を朝鮮文字の如く左より右に進み下に収むと解かれたるは余の見所に協へり。(62 頁)

■例えば碑中【郎君行記】に①②文字あり。而して此文字は①②③の三元字より成れるが如し。故に此

③

表音文字と表意文字が併存していることも指摘する。これで、契丹大小字の区別は、ほぼ遺漏無く為された²。あとは十分な質と量を持つ契丹大字資料の発見が待たれる。

③金毓黻 1934。論ずるところは羽田亨 1925 を出るものではない³。なお同書『遼陵石刻集録』に羽田亨 1925 の漢訳が掲載されている。

④山下泰蔵 1935。これは後に契丹大字とされる「静安寺碑」(山下氏は 1072 年立石と推定)の拓本を紹介したものである。残念ながら碑の摩損が甚だしく字画が明らかなものは少ない。「静安寺碑」の文字が、『書史会要』所載の文字とも、慶陵哀冊の文字とも異なることより、『書史会要』所載の五字を契丹大字とし、慶陵哀冊を契丹小字とし、「静安寺碑」を先行の契丹文字を簡易にした第三種の契丹文字とした。この契丹文字三種説は、形を変えて⑧長田 2001 に受け継がれることになる。

⑤長田夏樹 1951。50 年代に入っても契丹大字小字の認識は混乱していた。例えば、村山 1951 は慶陵哀冊中の契丹アルファベット(=原字)を契丹小字とし、契丹アルファベットを組み合わせた単語文字を契丹大字とする。これに対して長田氏は、契丹大字は漢字を改め作った“表意文字的なもの”で『書史会要』所載文字(=「燕北録」所載文字)がそれにあたり、小字は“表音的要素の多い文字”で慶陵哀冊の文字がそれであると正鶴を得た認識を示した。これは②羽田亨 1925 と同様の見方である。

三元字は他の元字と結合して現はる。・・【略】・・。其元字の数の割合に少きと其の一字の中に屢々現出するとの理由によりて余は此文字の漢字の如き文字にあらずして綴音文字なるべしと推定せり。(63 頁)

* 上において、契丹文字は便宜上①②③で代用した。

なお白鳥 1898 にはないが、Wylie. 1859 の当該箇所を資料として以下に添付する。

■The form of the grouping of the Korean characters also corresponds with those on the Kin tablet; and this may form a valuable hint in any attempt to unravel the contents of the latter. The order of sequence observed in the elements of the Korean words is first top left hand, then right, and lastly below; and no doubt the same rule applies to the Neu-chih writing. (p. 149)

² 以下に羽田亨 1925 の論点を抜き書きする。なお頁数は羽田博士史学論文集下巻による。

■僅か九十餘字の郎君行記の文字と、五百八十餘字中の極めて一少部分より明らかでない墓誌の文字との間に、かく迄同一の字を多く有して居ることから考へると、之を以て契丹字を刻したものと見ても、強ち穩當でないとはいはれまい。(426 頁)

■さて小字の製作は、此の如く迭刺が回鶻の言語や書を習ひ、之によつて工夫せられたもので、其の字数は少いが、然も該貫すと記されて居ることから考へると、回鶻字を模倣した音字であつたらうと考へるのは無理ではない。(428 頁)

■大字は前記の五字から考へて見ても、全く漢字に倣ふたものに違ないから、無論其の数は多かつたと考へられるが、小字が之に比して其の數少しといふ以上は、何か文字構成の上に於て大字とは異り、數が少くても多くの言葉を寫し得る組織を採つたものと見なければなるまい。かゝる組織は如何なるものであるかといふと、要するに音字を工夫し製作したものと見るのが適當であらう。(430 頁)

■燕北録に見ゆる字は前にも説いた如く、漢字の隸書の變形であるから、到底之を音字と見ることは出来ないが、墓誌の文字には、種々の元字を組み立て、複雑な一個の文字を作つたと見らるゝものが澤山ある。思ふに此の複雑な字畫は、之によつて數個のシラブルより成る一語を寫したものであらう。・・【略】・・。之と同一の字畫に違ないと思ふものを多く有する郎君行記については、既に白鳥博士が其の文字を解剖して考へられた結果綴音文字なるべきことを論ぜられた。余輩は大體に於て此の考を動かさないものと信ずるが、然も尚單に音字だけでなく、それと共に意字も存するのではないかと疑ふものである。(430 頁)

■従つて之とは全く體を別にし、また構成を異にしたと思はるゝ燕北録所載の五字は、所謂大字と認めなければならぬことに成る。(431 頁)

³ 余意小字之製、既在大字之後、且數少而賅貫(蓋先製成字母若干、再合併變化而成多字)、則興宗道宗二陵内國書哀冊、必契丹小字也。姑先作此假定、以待來日之印證。(卷第一緒言)

⑥金光平・曾毅公 1957 は、1951年に発見された「錦西孤山墓誌」(蕭孝忠墓誌)を利用したものである。慶陵哀冊などの文字を契丹小字とし、新たに発見された「錦西孤山墓誌」の文字を契丹大字とした。契丹大字の具体的な特徴が言及されるということはこれまでになかったことであり、ここに至って契丹大小字の確実な資料により両者の区別がなされることとなった⁴。もっとも、新資料が必ずしも的確な見解を生むわけではない。閻万章 1957 も新発見の「錦西孤山墓誌」を扱ったのであるが、金光平・曾毅公 1957 とは逆に、慶陵哀冊などの文字を契丹大字とし、「錦西孤山墓誌」の文字を契丹小字とする。これは“數少而該貫”という契丹小字の特徴を誤解したことによるものである。

⑦金光平 1962。これは女真大小字の別に重点が置かれた論文のようであるが、契丹大小字の別についても先の⑥金光平・曾毅公 1957 を補足して論じている。これにより契丹大小字の別については説が定まった感がある。

⑧長田夏樹 2001。かつて、山下泰蔵 1935 は契丹文字三種説を提出した。すなわち、『書史会要』所載文字(=「燕北録」所載文字)を契丹大字とし、慶陵哀冊を契丹小字とし、「静安寺碑」を先行の契丹文字を簡易にした第三の契丹文字とするものである。この説を、長田 2001 は形を変えて受け継ぎ、「静安寺碑」などを契丹大字とし、慶陵哀冊などを契丹小字とし、『書史会要』所載文字(=「燕北録」「成吉思皇帝聖旨牌」所載文字)を契丹大字を簡略化した第三の契丹文字とした⁵。

3. おわりに

以上を要するに、契丹大小字の区別は、理屈の上では羽田亨 1925 によってほぼ遺漏無く定められ、その後発見された確実な契丹大字資料を用いた金光平・曾毅公 1957 によって補充され定説となっていた。そして、長田夏樹 2001 に到って、『書史会要』所載の文字(=「燕北録」「成吉思皇帝聖旨牌」所載文字)は契丹大字を簡略化した第三の契丹文字であるとの説が出された。管見による限り長田 2001 が早いようであるが、この点については引き続き確認を続けたい。

<参考文献(発行年順)>

Alexander Wylie. 1859, "On an Ancient Inscription in the Neu-chih language," *JRASVI*, 1859, pp. 137-153)。

⁴ 以下に金光平・曾毅公 1957 の論点を抜き書きする。

■慶陵契丹字、有單文、有二個單文以上の拼合字、拼合字多是二個單文至七個單文聯綴而成的複體、從此看出、契丹語是多節語、由於每一字或每一詞、一語彙的音節多寡、也就影響了每個字形的繁簡。(83頁)

■錦西契丹字和慶陵契丹字相反、字形簡單、整齊、又和女真文相近。製字的方法、有的直用漢字、有的略改漢字的筆畫(例如馬作𠂔、・・【略】・)。(83頁)

⁵ 長田 2001 はさらに、この第三の契丹文字を参照して西夏文字が作られたとし、これを“先西夏文字”とする。この点については、私見であるが現段階では『書史会要』所載文字に類する資料が少なく何ともいえないのではなからうか。

- 白鳥庫吉 1898. 「契丹女真西夏文字考」, 『史学雑誌』第九編第十一・十二号。『白鳥庫吉全集 第五卷 塞外民族史研究 下』(岩波書店、1970年)所収, 45-68頁。
- 羽田亨 1925. 「契丹文字の新資料」, 『史林』第十卷第一号。『羽田博士史学論文集 下巻言語・宗教篇』(同朋舎, 第二刷 1975年)所収, 420-434頁。
- 金毓黻 1934. 『遼陵石刻集録』(巻第一「緒言」)。
- 山下泰蔵 1935. 「大遼大横帳蘭陵郡夫人建静安寺碑」, 『満蒙』16年10期, 62-67頁。
- 村山七郎 1951. 「契丹字解読の方法」, 『言語研究』第17・18号, 47-70頁。
- 長田夏樹 1951. 「契丹文字解読の可能性 一村山七郎氏の論文を読みて一」, 『神戸外大論叢』第2巻第4号, 40-66頁。
- 閻万章 1957. 「錦西孤山出土契丹文墓志研究」, 『考古学報』1957年2期, 69-84頁。
- 金光平・曾毅公 1957. 「附記」。これは閻万章「錦西孤山出土契丹文墓志研究」(『考古学報』1957年第2期)の83-84頁に付されたもの。雑誌編集者による「附記」であるが内容は金光平・曾毅公両氏の論の紹介となっている。
- 金光平 1962. 「從契丹大小字到女真大小字」, 『内蒙古大学学报』1962年第2期。『契丹小字研究論文選編』(内蒙古人民出版社, 2005年, 116-125頁)収載による。
- 劉鳳翥 1981. 「契丹大字和契丹小字的區別」, 『内蒙古社会科学』1981年第五期, 105-112頁。
- 長田夏樹 2001. 「契丹文字, 女真文字及び西夏文字の関連性についての一考察 一成吉思皇帝聖旨牌裏面の番字を足掛かりとして一」, 『長田夏樹論述集(下) 漢字文化圏と比較言語学—中国諸民族の言語・契丹女真碑文釈・民俗言語学試論・邪馬台国の言語—』京都市: ナカニシヤ出版, 738-745頁。